

は各宗の教理と高僧の事業を語る場へと変わり、「日本仏教史」を語るのと、各宗の独自性を主張するのが、同じ事柄の両面となる。

より厳密な検証が必要であろうが、まず次のように結論することが可能なのではないか——僧侶であり、アカデミズム官学の頂点に立った村上専精は、宗門を重視するような語りを「日本仏教史」の枠組みに行い、かかる作業により、彼は宗門の欲求を満たすと同時に、官学的な側面も満たすことが出来た。各宗門を「日本仏教」として語りなおし、その新たな構築物に「歴史」を与えた村上の営みは、この列島の仏教界が近世から近代へと再編成される重要な段階を意味するものであろう。

パネルの主旨とまとめ

西村 玲

従来の日本仏教史の研究においては、古代と中世が日本仏教の精華とされ、鎌倉新仏教が研究の主たる中心となる一方で、近世・近代については中世からの長い衰退の時期とみなされてきた。近世は、仏教勢力が寺檀制度によって幕藩体制の一翼を担うことにより、僧侶が墮落した時代とされた。近代は、神仏分離と廃仏毀釈が僧侶の奮起を促したことからは始まって、明治三十年代における清沢満之の精神主義によって、仏教思想の近代化が達成されたと考えられてきた。この見方は、ながらく日

本仏教史の通説であった。

この通説に対して、主として歴史学と宗教学の分野から、見直しが進められてきた。まず歴史学においては、一九七〇年代における黒田俊雄の顕密体制論によって、新仏教を中心とする中世仏教像は根幹的に改められた。黒田によって、新仏教に合理性や近代性を見出す近代主義的な仏教史観の見直しが開始され、現在にまで至っていると言えよう。近世史においては、一九九〇年代からの高埜利彦らによる身分的周縁論により、民間宗教者の社会的な分析が可能になり、近世における仏教の新たな意義が明らかになってきた。

一方、宗教学では、一九七〇年代に進展した国家神道の研究に加えて、それに続く新宗教の研究において、近代における仏教の大きな役割がはっきりと認識された。二〇〇〇年代に入ってから、それらの研究の達成と問題提起を引き継ぐ形で、さまざまな視点から近代仏教の研究が精力的に進められている。

近代仏教の研究が進展するにつれ、従来の古代・中世仏教像は、近代に見えられてきたものでもあり、近代仏教によって構築された側面が明らかになってきた。また近代仏教は、歴史的にヨーロッパ・アジア・アメリカなどと深く関わっており、一國史観では捉えきれない性格を持つ。近代仏教は、現在の我々の仏教認識を直接に創出してきた点で、本質的にトランスナショナルな性格を持つ点で、歴史的に特殊な位置にあるといえる。

本パネルは、歴史学・宗教学・思想史学という各人の専門分野において、こうした研究史を引き受けると同時に、近世から

パネル

近代にかけての日本仏教の連続と断絶を全体のモチーフとして、研究の新たな展開を目指す。引野亨輔は、近世の浄土宗と真宗の論争を題材として、法然と親鸞という師弟関係の上に立つ両宗が、それぞれ自己の優位を築くための論法を分析し、近世的な宗派意識が成立していく過程を論じた。谷川穰は、明治前期における公教育と仏教の関係について、四期に分けて歴史的考察を行い、両者が分離と接近を繰り返しながらも、明治三年の宗教教育禁止の訓令に至るまでに、徐々に住み分けが進んでいくことを明らかにした。西村玲は、近世の大乗非仏説は富永仲基のみならず、釈尊教団の再現を目指した律僧の実践行から生まれた疑問でもあることを示して、村上專精が両者を利用して近代の大乗論を形成したことを述べた。オリオン・クラウタウは、明治期における宗派性と通仏教概念の関わりについて、「日本仏教」がどのように語られたかに着目し、村上專精が宗門と官学アカデミズムを「日本仏教史」として一体化したことを論じた。

この四者の発表を受けて、林淳は、引野・西村は近世からの近代形成について論じ、谷川・クラウタウは近代独自の側面を論じたと論評した。本パネルの趣旨を総括して、前近代の文化資源を利用して、近代的な仏教が再編成されたと述べた上で、近代仏教のトランスナショナルな性格についての分析が欠けたことを指摘した。フロアからは複数の質問者によって、「宗派」という言葉は、時代的にその内実が変遷しており、近代的な宗派概念では一概に論じられないという意見が出された。

明治仏教の国際化と変貌

代表者・司会 吉永進一
コメンテータ 石井公成

明治二〇年代仏教界における

神智学をめぐる言説

吉永進一

明治時代の仏教と神智学については、すでに佐藤哲朗、Judith Snodgrassらの研究があるが、本発表では明治二〇年代の仏教メディアに表われた神智学関係の記事を材料として、そのブームの様相と思想的な遺産を検証したい。

明治二二年、神智学協会会長H・S・オルコットは第一回来日を果たし、全国各地で演説会を開き、大成功を収めた。一方これと平行して神智学の翻訳記事が仏教メディアを賑わせていた。とりわけ普通教校では、アメリカカ神智学協会W・Q・ジャッジとの文通を機に、世界各地の仏教徒つまり神智学徒との交流を開始して、『反省会雑誌』創刊号から「欧米通信」なる記事を連載している。この記事が好評であったために、欧米への本格的な文書伝道を行う海外宣教会が発足、また海外仏教徒の記事を集めた『海外仏教事情』が創刊されている。しかし、明治二二年をピークに神智学記事の数も激減し、オルコットの明治二四年の第二回来日は失敗に終わっている。この二回目の